

日本経済の根底にある仏教 ～近江商人とプロテスタントを比較して～

1170415 岸 健斗
高知工科大学マネジメント学部

はじめに

日本はアジアの国の中で唯一 G7 に入っており、経済大国として知られている。しかし、G7 に加盟している国は日本以外全て欧米の国であるのだ。アジアの中で唯一 G7 に加盟し、欧米の国と肩を並べるまでになったのには日本と欧米諸国になにか共通点があるのではないかな。

マックス・ヴェーバー著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』では、著者のマックス・ヴェーバーが、プロテスタンティズムの信者が多い地域ほど資本主義が発展していることに目をつけ、プロテスタンティズムと資本主義の関係について解き明かしている。宗教が経済に影響を及ぼすのであれば、日本では一番信者の多い仏教が日本の経済に影響を与えたと考えられる。実際に、近江商人という主に江戸時代に活躍した商人は仏教の宗派の一つである浄土真宗の教義を商売に取り入れるなど、浄土真宗の影響を受けていたのである。また、近江商人が設立した企業も多く、中には現在も活躍している企業があるのだ。

本論分では、近江商人と浄土真宗がどのような関係性を持っていたのかを調べ、浄土真宗が日本経済の基盤となったのかを解き明かす。それと共にプロテスタンティズムと浄土真宗、異なる宗教がどうして経済に良い影響を与えることができたのか、といった疑問から、この二つの宗教にはなにか類似点などがあったのかについても解き明かしていきたい。

序章

研究目的

異なる宗教（プロテスタンティズムと浄土真宗）がいかにして各地域の経済に影響を与えてきたのか。日本では浄土真宗が経済にもたらした影響が現在どのようにして受け継がれてきているのか、異なる宗教に何か共通点などがあったのかについて解き明かす。

背景

プロテスタンティズムの教えの下発展した資本主義。しかし、日本ではプロテスタンティズムが広まることなく経済大国へと成長した。日本の経済成長に影響を与えたのは浄土真宗である、というのが本論分の論旨である。

日本では浄土真宗に信仰深かった近江商人が江戸時代に活躍した。この流れが現在いくつかの日本企業にも受け継がれている。本論分では、日本の経済成長の起源となったものが浄土真宗であるということを前提に研究を進めていく。

概要

第1章では『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をもとに、プロテスタンティズムが資本主義の発展にどのような影響を与えたのかを述べる。第2章では近江商人と浄土真宗がどのような関連性を持っていたのか、近江商人とはどのような商人であったのかを『徳川時代の宗教』を主に、文献研究から述べる。第3章では近江商人の流れを汲んでいる企業伊藤忠商事に焦点を当てる。近江商人が生み出した企業が現在どのような経営理念を持ち、どのような活動をしているのかを述べる。第4章では、浄土真宗とプロテスタンティズムを比較し、互いの共通性があるのかなどについて解き明かす。

第1章 資本主義とプロテスタンティズム

1-1 「資本主義の精神」

マックス・ヴェーバー著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』では、プロテスタントであることが、資本主義の発展に繋がったとされている。ヴェーバーはこの関係性に目をつけ、プロテスタンティズムと資本主義には何かプラスの関係があるのではないかと考えた。しかし、プロテスタンティズムはもともと禁欲的なものである。営利を敵視しており、娯楽なども許されない宗教であったのだ。ではなぜこの宗教が資本主義の発展の一つの要因となったのであろうか。また、「資本主義の精神」とはどのようなものであったのだろうか。

ヴェーバーは資本主義の精神を表しているものとして、ベンジャミン・フランクリンの『自伝』に書かれた文章を紹介している。

「時間は貨幣だということを忘れてはいけない。1日の労働で10シリング儲けられるのに、外出したり、室内で怠けていて半日を過ごすとするば、娯楽や懶惰のためにはたとえ6ペンスしか支払っていないとしても、それを勘定に入れるだけではない。ほんとうは、そのほかに5シリングの貨幣を支払っているか、むしろ捨てているのだ。

信用は貨幣だということを忘れてはいけない。だれかが、支払期日が過ぎてからもその貨幣を私の手のもに残しておくとするば、私はその貨幣の利息を、あるいはその期間中にそれのできるものを彼から与えられたことになる。もし大きい信用を十分に利用したとするば、それは少なからぬ額に達するだろう。・・・貨幣は繁殖し子を生むものだということを忘れてはいけない。貨幣は貨幣を生むことができ、またその生まれた貨幣は一層多くの貨幣を生むことができ、さらに次々に同じことがおこなわれる。・・・支払のよい者は他人の財布にも力を持つことができる・・・これは時にたいへん役に立つ。勤勉と質素は別にしても、すべての取引で時間を守り法に違わぬことほど、青年が世の中で成功するために役立つものはない。」¹

フランクリンのこの考えは、営利活動による資本の増大を倫理的な義務とみなすようなものである。しかし、このような考えに対して、ヤーコブ・フッガー（ドイツの豪商）は「生きている限り儲けよう」という考えを持っていた。この2つの考えを見比べてみると、フランクリンの考えはフッガーに比べて、金銭欲だけでなくいくらかの倫理的な側面も持ち合わせていると言えよう。

しかし、この「資本主義の精神」は従来通り生きていけばいいという考えの「伝統主義」と対立したのであった。さらに、それまでの経営は伝統主義で成り立っているものも多く、経営組織のありかたから「資本主義の精神」が生まれてくるようなことはなかったのである。ではどのようなきっかけで「資本主義の精神」が経営の中に入り込み成長していったのであろう。

そのきっかけとなったのがプロテスタンティズムであったのだ。

1-2 資本主義に影響を与えた「天職」

プロテスタンティズムのなかでもいくつかの宗派がある。その中でもカルヴィニズム、敬虔派、メソジスト派、再洗礼派、以上が禁欲的プロテスタンティズムである。この中でカルヴィニズムの「予定説」という教えは人々に大きな影響を与えたのであった。「予定説」とは生まれながらにして、人は救われるか滅んでいくのかが決まっている、というものだ。つまり、自分が死んだ後、天国へ行くのか地獄へ行くのかは最初から決定しており、これを覆すことはできないということだ。当時カルヴィニズムの信者であった人々は、はたして自分は救われているのだろうか、それとも地獄へ墜ちてしまうのだろうか、と不安に駆り立てられたのである。そこでカルヴァンは信者たちに、神から与えられた職業に没頭することで自分が救われているとの確信を得ることができる、と説いた。この神から与えられた職業というのはマルティン・ルターが説いた「天職」という概念である。

ルターとは、当時（16世紀）のカトリック教会の教えに疑問を抱いており、宗教改革運動を起こした人物である。当時カトリック教会では免罪符を購入すれば罪から救われるという倫理であったのだ。しかしルターは、信仰することで人は救われる、という確信を持っていたのである。そして、信仰のみにより義（神の前で正しい）という考えを深めていくうちに、カトリックの僧侶たちが免罪符などで金儲けしているのは明らかに間違っていると批判し、職業労働こそが神に喜ばれる唯一の道であると主張したのである。なぜ職業労働なのか。それは人々が就いている職業は神から与えられたものであり、職業に専念することで神が喜ぶ、という考えからきているからである。これがルターの「天職」という概念である。

カルヴィニズムの人々は職業労働を懸命に行い「救いの証」とされる「神の栄光」の増大を目指そうとした。「神の栄光」の増大は有益な職業から生まれるとされており、有益なのかどうかを指し示すものは「収益性」であったのだ。つまり、金を儲ければ儲けるほどその職業は宗教的に有益とみなされたの

図1からも分かるように、近江商人全員が近江出身だったわけではない。各地方によって「八幡商人」「日野商人」「湖東商人」「高島商人」と呼ばれていた。また、図2からは近江商人が全国各地に出店を開いていたことが分かる。近江商人は各地の重要拠点に出店を開き、全国各地の物資を流通させることに成功したのであった。

近江商人が全国各地に出店を出すことができたのは、リスクマネジメントが優れていただけではない。近江商人には欠かすことができない言葉がある。それは「三方よし」である。「三方よし」とは「売り手よし、買い手よし、世間よし」といわれ、近江商人の経営理念を表すものである。このなかの「世間よし」が、近江商人が全国各地に出店を開けたもう一つの要因であろう。売り手と買い手は文字の通り、商売における当事者のことを指し、世間とは社会のことを指す。「三方よし」を経営理念に掲げていた近江商人は、売り手買い手の利益を求めるだけでなく、社会にも認められるような商売を行っていたのである。特に代表的なものが「陰徳善事」である。「陰徳善事」とは「目に見えぬ陰の間にて人のためになるよう動く」といった意味である。近江商人は商売が成功して得たお金を各地で社会貢献などにあてていたのである。このような活動が全国各地に出した出店の地域でも認められ、近江商人は全国に進出できたのであった。他の日本三大商人の大阪商人には「商ハ笑ニシテ勝ナリ」、伊勢商人には「商のかけ引、時節に従ひ考えを凝らし、時を見、変を思うべし。」など、客を喜ばせるように創意工夫するべきといった意味から生まれた言葉はある。しかし近江商人のように世間に認められる商売をすべきといった「三方よし」のような理念は無かったのである。では、この「三方よし」という考えはどこから生まれてきたのであろうか。

2-2 近江商人と浄土真宗

近江商人が生んだ「三方よし」の考えは浄土真宗の教えから生まれた。近江商人の多くは浄土真宗に深い信仰心があったのだ。近江商人は商売人を引退し隠居生活に入ると、宗教活動を行った。そこで浄土真宗の教えを基に家訓・店則を定めたのであった。そもそも近江商人はなぜこれほどまでに浄土真宗を信仰していたのであろうか。

辻井清吾が書いた論文「近江商人の経済倫理と信仰の意義」では「一五世紀に真宗本願寺の中興の祖として著名な第八代法主蓮如が熱心に布教・教化活動をなした地域が近江であり、江戸時代には、真宗の盛んな地域となった。又、近江商人の家訓・店則に見られる各々の宗教意識には「仏法を信じ、慈悲をもって日常生活を過ごし、先祖を祭る事により、一家の伝統を守る事」の精神が自然の流れとして連綿と見られる。又、家訓には、「和合」「出精」（せいを出して働く事）「不奢」（奢る事なくケチる事もなし）「孝行」の言葉が多くみられ、社会構造の変化に真宗が対応しつつあり、近江商人はこのような時代・地理的背景の下で成長し、真宗の世俗倫理観を受容していった。」²と書かれているように、この蓮如の布教活動により近江商人は浄土真宗門徒を多く輩出したのであった。近江商人の多数は商売に向かう途中にある浄土真宗の寺院に立ち寄るなど、熱烈な浄土真宗の信者になったのである。

しかし、仏教というものは「食欲＝罪」である。商売を繁盛させてお金儲けをするという事は卑しいものになってしまうのである。ただ、浄土真宗の教義はこの考えを超え、「自利＝利他」の教えにより、商業上の利益を宗教上の「ご利益」で正当化したのであった。「商業は生産せる物品を需要者に供して、以てその報酬を受くるを云ひ、工業は物品を生産して、需要者に供給し、其報酬を受くるを云ふ。世俗、此報酬を呼びて利益となす。而て其利益を受くる所以のものは、即ち是れ他を利するによる。故に商業と云ひ、工業と云ふ、共に他を利するの心行のみ。他を利するの心行によりて、自ら利するの功德を受く。之を自利利他円満の功德と云ふ。」³との教義が、近江商人が優位性を持ち得た背景であり、「三方よし」の原点となったのである。近江商人は各々の店員に「商売は菩薩の道」という教えを徹底的に伝えたのであった。

では、ここにいたるまで、つまり浄土真宗の教えが商売を成功させる促進剤の一つになったのはなぜなのか。実は、近江商人に浄土真宗を広めた蓮如が商売と浄土真宗を繋げるきっかけとなった人物の一人であったのだ。

もともと浄土真宗とは信仰のみによる救済を強調したものであり、論理的要求にはほとんど注意をはらわなかった。例え悪

人であったとしても、浄土真宗を信仰し、念仏を唱えることにより往生できる、といった宗教だったのである。しかし、蓮如にとって職業生活とは日常生活から切り離すことができないものであり、宗教生活にも欠かすことができなかつたのだ。もちろん、だからといって仕事に励みお金を儲けようという考えではなかつた。むしろ、蓮如は従来の「食欲＝罪」の教えを深く受け止め、禁欲主義であったのだ。

「たとえ貧窮さの中にあっても、彼は常に阿弥陀如来に感謝し、その慈悲によって生きているのだと信じた。彼は食事の席につく時はいつでも、「世の中には、食べるものもなくして飢えている人が多くいるのに、自分がこの食事をとることのできるのは何と仕合わせであろう」というのが常であった。それから彼はいつも、手を合わせて阿弥陀の御名をと覚えて、心から感謝をと能えるのだった。彼は自分の家族や弟子たちにたいして、いつも、日常生活に必要な何ものをも無駄にしてはならない、それは、そのようなことをすると、創造への冒瀆の罪を犯すことになるから、と教えた。ある時、彼は、廊下にすてられている一枚の紙をみつけた。彼はそれを拾って、うやうやしく頭上にかかげ、ためいきをついて次のように述べた。「仏の恵みたまうたものを無駄にするとは、さてさて罪深いことよ。」⁴

これは蓮如の弟子が蓮如の普段の様子を書きとめていたものである。この文章からも分かるように蓮如は非常に禁欲的に生きていたのである。

しかし蓮如はこのような考えの一方で、論理的な要求を真宗思想において非常に重要なものとしたのであった。蓮如の職業に対する見解は「もしわれわれが仕事に従事するならば、それは、仏教に奉仕するものであることを理解しなければならない。」⁵ というものだった。このような考えの蓮如が近江商人に多大な影響を与えたのであった。そして、浄土真宗に対して信仰深い人々は、自己の職業を勤勉に働くことを惜しまずしたのであった。これが近江商人の活躍に繋がったのだ。

第3章 伊藤忠商事にみられる近江商人の伝統

3-1 伊藤忠商事の経営理念

近江商人の経営理念である「三方よし」を受け継いでいる企業の代表として、伊藤忠商事がある。今回近江商人ゆかりある企業が数多くある中で伊藤忠商事を選んだ理由は、総合商社のなかでも日本有数の企業であり、2016年3月期には最終利益で日本トップの成績を出したからである。繊維、食品、エネルギーなど様々な分野で活躍し、日本トップの総合商社になった理由を考察していきたい。

伊藤忠商事の創業者は近江商人を代表する人物の初代伊藤忠兵衛である。伊藤忠兵衛は浄土真宗の門徒であり、浄土真宗に対して深く信仰していた。また、浄土真宗の教えを店員や企業のシステムにも徹底的に取り入れたのであった。店法の制定、会議制度の導入、利益三分主義、運送、保険の利用、洋式簿記と学校出の採用、貿易業への進出をはじめ、自主独立の創意や理念である利真於勤は現在も伊藤忠商事として受け継がれている。なかでも、利益三分主義とは、まだ封建色が濃い時代に、店の純利益を本家納め、本店積立、店員配当の三つに分配するというもので、店員と利益を分かち合う、当時としては大変先進的な考え方であった。

そして、伊藤忠商事は「三方よし」の経営理念を現在まで受け継いできている。コーポレートメッセージの文章では「社員一人ひとりが、ビジネスの現場で、マーケットが求めている商品やサービスをお届けし、広く社会に豊かさを提供し続けること、また「商うこと」の先に広がる豊かさを提供していくことが、社会に存続を許され続けるためには不可欠です。これらはまさに、創業者である伊藤忠兵衛をはじめとする近江商人の経営哲学である「三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)」と一致する持続的発展の道筋であり、当社が果たすべき「使命」です。」⁶と、述べている。

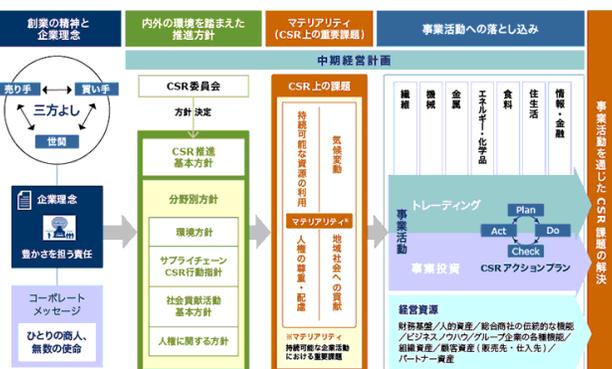
また、伊藤忠商事のCSRは持続可能な社会へ向けて、企業が事業活動を通じてどのような役割を果たしていくのかを考え行動していくことであると考えている。この考え方は、創業者の伊藤忠兵衛が事業の基盤としていた近江商人の経営哲学「三方よし」の精神につながるものでもある。

企業理念や外的環境の変化を踏まえた伊藤忠商事の CSR 推進の方向性を「CSR 推進基本方針」として定め、CSR を組織的・体系的に推進している。また、CSR 上伊藤忠商事が優先的に解決

つかりとした経営理念を掲げているということだ。また、この経営理念の中にも共通点はある。それは、良質廉価、身の丈に合った経営を行ってきていることだ。

CSR とは、前述したように企業が社会に対して責任を果たし、社会とともに発展していくための活動である。アメリカでは CSR について論議されるようになったのは 1990 年代後半からである。日本では 1970 年代から企業の社会的責任を問題に取り上げ、昨今では CSR と言われるようになってきた。

しかし、これらの言葉が生まれる何年も前から「三方よし」という言葉は生まれていたのである。日本に長寿企業が多い理由。それは、CSR という言葉が浸透するはるか前から、企業と地域双方がいかにか共存できるかを考えながら経営を進めてきたからであろう。



すべき重要課題として定めたマテリアリティを「CSR アクションプラン」に落とし込み、中期経営計画の方針に基づき推進するトレーディングや事業投資といった事業活動を通じて、CSR 上の課題解決につなげているのである。この流れを図示したので表 1 である。

表 1 伊藤忠商事の CSR 推進図 伊藤忠商事(2016) 7 頁
3-2 「三方よし」と日本の経営

第二章でも述べたように、よく「三方よし」は CSR の先駆けといわれている。近江商人になぜこのような考えが生まれたのか。それは、近江商人が浄土真宗の教えを深く信仰していただけではなく、商売上の特徴にも関係しているのではないかと。近江商人は全国各地に支店を持っていたため、見知らぬ土地に足を運ぶことも多かった。そのため、初めて訪れる地域に住んでいる人たちに信用されるために、道路の補修を行うなど、その地域に溶け込む努力をしたのであった。つまり、「三方よし」の「世間良し」の「世間」とは、CSR でいうところの「社会」まで、広い意味で使われているのでなくある特定の場所を指す「地域社会」であったのだと思われる。しかし、近江商人は、商売が客と店員だけの利害関係だけで成立するものではなく、社会に認められる、貢献できるものではないといけないことを示してくれた。このことを考えると「三方よし」は CSR の先駆けと言えるだろう。

実は、日本は 100 年以上続いている長寿企業の数が世界で一番多いのである。長寿企業の共通点としては、創業当初からし

第 4 章 仏教が作り出した日本の経済基盤

4-1 プロテスタンティズムと浄土真宗の比較

日本とヨーロッパ、異なる地域で経済が発展できた理由の 1 つに宗教が関係してきたとここまで述べてきた。しかし、同じ経済を発展させてきたといっても、キリスト教と仏教は異なるものである。なぜ異なる宗教が経済にプラスの影響を与えることができたのか。この章ではこの疑問を解き明かしていきたい。

1 章で紹介したヴェーバーはプロテスタンティズムと浄土真宗について以下のような見解を述べていた。

「日本の仏教は、中国に由来する。六世紀前半に挑戦を通じ、やがて中国から伝わって台頭した日本の仏教は、本質的には中国の仏教であった。日本の貴族の全文献が基本的にそうであるように、仏教の文献も長いあいだ漢字にしばられていた。

仏教受容の目的は、第一にそれによって臣民を馴致、訓育し、第二に漢文に通じた仏僧を政治的な役職につけ、第三に第一級の知識人の一人一聖徳太子が傾倒した中国文化によって、日本をより豊かにすることであった。しかし、日本人の社会生活に固有の性格は、宗教的要因とは異なる事情によって形成された。すなわち、政治的・社会的構造の封建的性格である。日本では、封建制が鎖国をうながし、ヨーロッパ的な意味における「市民」

階層の発展を阻止した。自治権の担い手である「都市」の概念が、日本にはまったく欠けていた。(中略)

明治維新によって、レーエンは解体され、それにかわって官僚支配が導入されて、封建時代に高く評価された名誉観念は、その一部に継承された。だが封建的な名誉観念から、市民的な企業倫理は生まれるべくもなかった。維新後、ヨーロッパの実業家は、しばしば日本人の大聖人の低級な商業道徳を嘆いたが、その一因は、商業を相互欺瞞の形式と考える封建的な思想によって説明されよう。その一方で、日本には封建的な名誉観念を超えて、感情生活を浄化し、発展させるものがあった。アニミズムや呪術的な崇拜とは正反対の合理的な教え—大乘仏教である。

それは儒教的な戒めと融合して、品位ある挙措と礼節を調和させた人物像を理想とさせた。どれだけの人がそうであったかは別として、高い教育をうけた者は、自分をそうした理想の代表者として自覚するのがつねであった。

日本の仏教は、中国の諸宗派の流れを汲みながら、独自の発展の方向を示した。十三世紀の初めに創始された浄土真宗は、もっぱら阿弥陀仏に対する敬虔な帰依を重んじ、善行往生を否定した点においてヨーロッパのプロテスタンティズムに比することができる。阿弥陀仏を信じることだけが、救済をもたらす内面的な基準なので、真宗は僧侶の独身や出家主義を排除した唯一の仏教宗派であった。僧は妻帯し、職業上は特有の服装をした僧侶であるけれど、ほかの生活態度は俗人と変わるところがない。それまでの仏教諸宗派において、妻帯は戒律の墮落の産物であったが、真宗では多分に自覚的な現象として現れた。説教、教訓、民間の読物は、多くの点でヨーロッパのルター派に類似した方法で発展し、「市民的」社会のなかに大きく勢力を伸ばしたこの宗教は、ヨーロッパの文化要素をもっとも好んで受容できる階層に属していた。⁷

ヴェーバーはこのように、浄土真宗とプロテスタンティズムの共通点を指摘していたのであった。しかし、なぜ浄土真宗は善行往生を否定し、僧の妻帯を認めるという革命的な変化を起したのであろうか。これには浄土真宗の開祖親鸞、またその師である法然の思想が深く関わっていたのであった。

親鸞の師である法然は、修行僧が多く集まった比叡山で抜群の秀才であった。法然は多くの人は自力では生きられない、周りの救済を本願とした阿弥陀如来の他力に救われて、初めて往生が実現すると考えた。これが浄土真宗の「他力本願」の本当の由来である。それまで行われていた、貴族などの富のある者が行って徳が高いとされていた、多額の布施、堂塔の建立、仏法の厳しい修行などを全て否定したのであった。なぜならこのような行動を往生できる術だと認めたら、富のないものは往生できなくなってしまうからだ。そこで法然はだれにでもできる称名念仏を唯一の正行として選択したのであった。この結果、自分が地獄に落ちてしまうのではないかなどとおびえていた人々は、法然の思想に深く信仰し始めたのだ。

また、法然は念仏で「聖で申されずば、妻をもうけて申すべし。妻をもうけて申されずば、聖にて申すべし」と述べ、僧の妻帯を否定しなかった。そしてこの考えを受け継いだ親鸞が公然と妻をもうけたのであった。当時の僧侶は妻を持つことは固く禁じられていた。欲のまま行動することは本当の幸せにつながらないとされていたからである。また、仏教では心で異性のことばかり考えていたら、たとえ口や体でやらなくても、妻帯しているのと同じだと教えられていた。しかし親鸞は、もし結婚すると幸せにならないとするのならば、全ての人は幸せになれないと考えたのであった。それゆえ親鸞は僧侶の結婚をみとめ、また、念仏を唱えることによってどのような人も救われるといった思想の浄土真宗を開いたのであった。

プロテスタンティズムも救いは行いによらず信仰のみにより、聖職者も独身の義務は無いとされている。ヴェーバーが述べたように、浄土真宗とプロテスタンティズムは共通性があるのだ。また、ルターが天職という概念を生んだように、日本でも天職と類似した概念を生み出し、世に広めた人物が第2章で述べた蓮如以外に存在したのであった。その人物は鈴木正三という、三河出身の武士であった。

4-2 日本における天職概念

正三は武士として四十歳余まで暮らしたが、あるときいきりに世間が嫌になり、出家したのであった。彼の仏法は曹洞宗の禪と浄土真宗の念仏を共に取り入れた「禪浄双修」という特異

なものであった。そのため他の僧侶からは「天然の外道である」などと厳しい批判をうけたのだ。しかし正三はそのような批判を気にも留めず、厳しい修行を行っていたのである。その時の様子を弟子の恵中が書きとめていた。

「われは出家後、人に何といわれようと、気にしたことがない。諸方を行脚し、野山に臥し、衣食を切り詰め、また一頃は律僧になって身体を責めて、三河の山中で律の修行をしたときは、ずっと麦粥麦飯だけですごした。そうして風雨に曝されつづけているうちに、粗食に臓腑が疲れて病になり、それが大事に至ってほとんど死にかけた。

さまざまな療治をしたが本復せず、医者にも見放され、いよいよ臨終ということになって、近くに住む親類がみんな集まってきた。そのなかに医者をしている弟がいて、われを診察し、薬も何もいらぬ、ただ食養生をすればよい、といった。それは何かと問えば、肉食のことなり、という。聞いてすぐ字、養生ならば、死人の肉でも食べよう、と行って、われは肉食をし、二年ほどしてすっかり本復した。病が癒えれば、薬（肉食のこと）も必要ないので、以後は精神潔斎して今日に及んでいる。しかし、当時人に悪くいわれたことは、並大抵のものではなかった。恥知らずの正三であればこそ、危うく失いかけた生命を肉食で養い、今日まで生きながらえて修行に大方しおおせることができた。

何につけても、はっきり決断する心がなければ、物事は成就しないものだ。」⁸

肉食は僧にとっては禁じられている行為であり、ただでさえ批判されている正三にとってはさらに叩かれる要因の一つになりうる行為である。しかし、肉食が養生にいいと聞けば何のためらいもなく肉を食べる。正三は思い立つとすぐに行動を起し、自分の信念を貫き通す人物であるのは明らかだが、同時に合理的な考えをもっていたのであった。また、彼は彼自身が武士であった頃から、仏法と世法は同一であると考えていた。そしてこのような人物が日本で初めて土農工商それぞれの「職業倫理」について記述したものが『万民徳用』という本であった。『万民徳用』は仏法修行について書かれた修行乃念願、三法之徳用、土農工商の職業倫理を述べた四民日用の三部構成となっている。

ここでは四民日用のなかでも農民について書かれた農民日用を要約したものを紹介したい。

「ある農人が聞いた。後生の一大事（死後の極楽往生を大切に生前一心に修行すること）を疎かにしてはならぬとおもいながら、農業に追われて隙がなく、むなしい今生をすごして、未来に苦を受けるのは、無念のきわみである。いかにすれば仏果に至ることができるであろうか…と。

答えていう。農業すなわち仏行なり。それに心がいならぬときは賤業なれど、信心堅固であれば菩薩の行である。

隙を得て後生を願おうとするのは誤りなり。かならず成仏を遂げんとする者は、極寒極熱の辛苦の業をなし、鋤鋤鎌を用いて、煩惱の叢茂きこの身心を鋤き返し、雑草を刈り取り、身心を責めに責めて耕作すべし。身に隙を得たときは、煩惱の叢がさらに茂るもの。辛苦の業をなし、身心を責めるときは、この煩惱が消える。つまりつねに仏行をなしているのとおなじことである。農人がほかにどんな仏行をする必要がある。それ農人として生を受けることは、天より授かり給う世界養育の役人となることなり。この身を一筋に天道に任せ奉り、かりにもおのれの為のみをおもわずして、正天道の奉公に農業をなし、五穀を作り出して、仏陀神明を祭り、万民の命をたすけ、虫類等にいたるまでの済度（救済）の願いを施す大誓願を立てて、一鋤一鋤に、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称え、ほかに余念なく農業をなせば、田畑は清浄の地となり、五穀も清浄食となって、食する人の煩惱を消滅する薬となるであろう。

人間の一生は、夢の中の夢である。身にあまる業をもとめても、それは短い夢のあいだだけのこと。ひとえに後生の一大事をおもい、勇猛の念仏間断なく、一念のうちに農業をなさば、知らず知らずのうちに誠の心が極まり、大解脱、大自在の人となって、未来永劫、極楽浄土の楽を受け入れられることは必定である。信じて会得せよ、信じて会得せよ。」⁹

このように正三は農民だけでなく、武士、商人などに対してもそれぞれの職業倫理を説いている。そして、煩惱には走らず、禁欲的な労働に没入せよ、自分の職業を南無阿弥陀仏と称えながら行うことで救われると、述べている。これはルターやカルヴァンが説いた職業倫理、労働倫理とほとんど同質のものである。

ると考えられる。当時資本主義には程遠かった日本の経済を支えたのは、来世における仏の救済を信じ、現世で不当な利益を得ることをよしとせず、禁欲的に勤勉に、自己の労働に励み、合理性をかねそなえていた宗教倫理、経済倫理であったに違いないと言えよう。

終章

本論文ではマックス・ヴェーバー著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読んだことがきっかけで、日本における宗教が経済に与えた影響を、文献をもとに述べてきた。本論文では現在の日本企業がどの程度宗教の影響を受けているのかまでには至らず、伊藤忠商事についてしか述べることはできなかった。しかし、日本が江戸時代に鎖国などを行い封建的であったにもかかわらず、国内で経済の基盤を作り上げた要因として仏教が関与したのは紛れもない事実と言えよう。また、その基盤をもとに現在も活躍できている企業は伊藤忠商事のように存在しているのも事実である。

宗教と経済、一見何ら関わりの無いように見えるが、宗教が経済に及ぼす影響は多大なものであったと今回論文を書くにつれ深く理解することができた。本論文は、文献をもとに書いたため新たに解明できた点は必ずしも多くはないが若干なりとも寄与できたのではないかと思われる。

引用

- 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 40-41 頁
 - 「近江商人の経済倫理と信仰の意義」 7 頁
 - 『徳川時代の宗教』 237 頁
 - 『徳川時代の宗教』233 頁 (『親鸞とその浄土信仰の宗教』より孫引き)
 - 『徳川時代の宗教』 232 頁
 - web「三方よし」と伊藤忠商事の CSR
 - 『仏教と資本主義』 89 頁-91 頁 (『世界宗教の経済倫理』より孫引き)
 - 『仏教と資本主義』 108-109 頁
 - 『仏教と資本主義』 112-114 頁
- 参考文献
- マックス・ヴェーバー著 大塚久雄訳 1905 年『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫
- 勝又正直 2002 年「マックス・ヴェーバー著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読む」 名古屋市立大学看護学部紀要
- R. N. ベラー著 池田昭訳 1996 年『徳川時代の宗教』 岩波文庫
- 楠英明 2009 年「近江商人系企業における日本的経営理念の伝統と発展」人間科学研究
- 有馬敏則 2010 年「「近江商人」についての一考察」朝日新聞・滋賀大学パートナーズシンポジウムとの関連において」滋賀大学経済学会
- 辻井清吾 2016 年「近江商人の経済倫理と信仰の意義：松居遊見と浄土真宗僧香樹院徳龍との関係を主にして」 佛教経済研究 45
- 青木崇 2016 年「近江商人の流れを汲む伊藤忠商事の企業理念と企業の社会的責任活動」 商大論集
- R. N. ベラー著 池田昭訳 1996 年『徳川時代の宗教』岩波文庫
- 長谷部日出雄 2004 年『仏教と資本主義』新潮社
- <http://shakaigaku.exblog.jp/20226502/>
(最終閲覧日 2017 年 2 月 10 日)
- <https://www.philosophyguides.org/compact/weber-geist-super-compact-summary/>
(最終閲覧日 2017 年 2 月 10 日)
- <http://lets-bible.com/reformation/r02.php>
(最終閲覧日 2017 年 2 月 10 日)
- <http://www.omi8.com/annai/goroku.htm>
(最終閲覧日 2017 年 2 月 10 日)
- <http://www.sanpoyoshi.net/profile.html>

(最終閲覧日 2017 年 2 月 10 日)

<https://matome.naver.jp/odai/2135665607927206501>

(最終閲覧日 2017 年 2 月 10 日)

<http://www.itochu.co.jp/ja/csr/itochu/philosophy/index.html>

(最終閲覧日 2017 年 2 月 10 日)

<http://www.itochu.co.jp/ja/csr/itochu/policy/index.html>

(最終閲覧日 2017 年 2 月 10 日)

<http://www.sankei.com/economy/news/160506/ecn1605060036-n1.html>

(最終閲覧日 2017 年 2 月 10 日)